

アイヌ語の場所表現に関する記述的研究： 認知言語学的観点から

井上拓也

京都大学大学院

severnayazemlya@gmail.com

キーワード：アイヌ語、定性、構文、概念メタファー

1. はじめに

本稿では、アイヌ語の「場所表現」と呼ばれる文法的制約の構文的意味について考察する。アイヌ語では通常、名詞（句）と格助詞が共起する際には、その間に位置名詞（positional noun）を挿入する必要がある。この文法的制約を受けた表現は「場所表現」と呼ばれている（田村 1982, 中川 1984）。また、アイヌ語の場所表現の中で現れる名詞句は定表現でなければならないということが井筒（2006）によって指摘されている。

しかし、先行研究では、特に場所表現で現れる場所名詞（名詞節を形成する役割を持つ形式名詞、地名、それ以外の「語彙的場所名詞」）についての統一的な記述はなされていない。本稿は、まず2節で場所表現の文法的制約に関して先行研究でどのように記述されてきたのかを概観したのち、3節以降から、Langacker (1991, 2008) の「参照点構造」の概念を援用しつつ、場所名詞を含めた場所表現で示される概念構造¹について、定性の観点から分析していく。4節では、認知言語学における「構文」(Lakoff 1987, Taylor 1989) の視点から、井筒（2006）で示唆されている「定表現」を場所表現のスキーマ的な意味として捉え、それぞれの名詞において実現されている用法を、具体化された構文として記述する。5節では、本論文のまとめと展望を述べる。

2. 先行研究

ここでは、アイヌ語の場所表現という文法現象がどのようなものであるかを概観し、先行研究でどのような記述や、説明がなされてきたのかを概観していく。

2.1 場所表現の文法的制約

場所表現の特徴は、以下の二つにまとめることができる。

I 位置名詞との共起

アイヌ語では、通常、*ta* 「～に、～へ、～おいて」などの位置や方向を表す格助詞を用いる際、*or* 「～のところ」をはじめとして、*ka* 「～の上」、*corpok* 「～の下」、*oske* 「～の中」、*soy* 「～の外」、*etok* 「～の前・先」、*oka* 「～の後」などの位置名詞を一般名詞に後置する必要がある。また、アイヌ語において、名詞には概念形 (e.g. *tek* 「手」と所属形 (e.g. *tekehe* 「～の手」) のように二つの形式がある。場所表現では、普通名詞の概念形は必ず位置名詞を伴わなければならない。

- (1) a. ??cise ta hosippa=an.

家 に 帰る = 1SG

「私は家に帰った。」

- b. cise or ta hosippa=an.

家 ところ に 帰る = 1SG

「私は家に帰った。」

cise は「家」の概念形であり、(1b) のように必ず位置名詞 *or* を伴う必要がある²。

II 位置名詞の省略可能性

位置名詞を省略できるのは、(a) 指示詞を用いる場合、(b) 所属形を用いる場合、そして (c) いわゆる「場所名詞」である。場所名詞には、(i) *kim* (狩場としての山) などの一部の普通名詞、(ii) 名詞節を形成する形式名詞、そして (iii) 地名を含む場所名詞 (locative noun) が含まれる。以下では、この3つの名詞について例示しながら説明する。

(a) 指示詞を伴う場合

指示詞が前にあるとき、以下の (2) のように、指示詞 *nean* 「それ」、近称 *tan* 「これ」、中称 *toan* 「それ」遠称 *taan* 「あれ」のいずれかを前置すると位置名詞を省略できる。

- (2) *nean cise ta hosippa=an.*

その 家 に 帰る = 1SG

「私はその家に帰った。」

(b) 所有表現、もしくは所属・所有を表す場合

一般名詞の所属形が用いられるときも、以下の (3a) の様に位置名詞を省略できる。

また、(3b) の様に、「持つ」という意味を表す動詞 *kor* を用いた所有表現も、位置名詞を省略した場所表現で使うことができる。

- (3) a. *ku=pu-wehe ta ermu oka.*
 1SG=倉-Poss に ねずみ いる
 「私の倉にねずみがいる。」 (中川 1984: 13)
- b. *an=kor cise ta hosippa=an.*
 私=持つ 家 に 帰る = 1SG
 「私は自分の家に帰った。」 (井筒 2006: 18-19)

(c) 場所名詞の場合

(c-i) 特定の普通名詞

kim などの、意味的に場所を表す特定の普通名詞は、(4) のように位置名詞を省略することができる。

- (4) *kim ta k=arpa.*
 山 に 1SG =行く
 「私は山に行った。」

(c-ii) 名詞節を形成する形式名詞

-hi や *-hike* などの形式名詞は、通常修飾語を伴って現れ、先行する動詞句や節を名詞化する役割を持つ。

- (5) a. *kanto hanke hi ta*
 天界 近く ところに
 「天界近くに」
- b. *na ku=pon ine pa ku=ne hi ta*
 まだ 1SG=小さい 4 歳 1SG=である ときに
 「まだ私が小さい、四歳だった時に」

(5a) の修飾節は空間的な位置関係を表しているが、(5b) の修飾節は空間ではなく、単なる叙述内容である。しかし、このような形式名詞も直後に格助詞が伴うため、先行研究の中では「場所名詞」として扱われている。

(c-iii) 地名

地名を用いる場合は、位置名詞を省略できる。

- (6) a. Ubun ta hosippa=an.

雨分（地名）に 帰る = 1SG

「私は雨分に帰った。」

- b. Wakkanai ne oman kisa ne sekor haw as.

稚内（地名）に 行く 汽車である という 声 ある

「稚内に行く汽車だと言っていた。」

なお、(a) ～ (c) の全ての場合において、位置名詞の省略は必須ではないが、地名を用いる場合は、位置名詞がほぼ省略される傾向にある。

2.2 場所表現に関する先行研究

「場所表現」という名称にも表れている通り、先行研究では場所表現の意味を論じるために《場所》という概念が提示され、論じられてきた。そのため、この節ではまず《場所》という概念について概観する。

また、場所表現で扱われる名詞句の意味は、単純に位置を表すものや所属まで多岐にわたる。こうした様々な意味の違いを超えて同じ場所表現という形式の中で扱われるということの説明について、中川 (1984) は所属形と「具体性・個別性」との関連性について論じており、田村 (2003) は「領域概念」という概念を用いてより包括的に論じている。更に、井筒 (2006)、北原 (2006) は場所表現全体を通して現れる「定性」という特徴について挙げている。これらを概観したのち、最後に、これらの先行研究の問題点と、本稿の立場を述べる。

2.2.1 《場所》という概念

田村 (1982) は、アイヌ語における《場所》について以下のように説明している。

「アイヌ語には、《場所》として扱われる名詞句を前置させる格助詞が4つある。(中略) ここで《場所》と呼ぶのは、《場所》である Sapporo 「札幌」は格助詞 ta の前にそのまま於けるが、《場所》ではない pet 「川」や cise 「家」は ta の前に位置名詞 or 「～のところ」を後置させると《場所》として扱われる現象のことである」(田村 1982: 1)

田村 (2003) はこれを受けて、アイヌ語において普通名詞（概念形）に位置名詞を後置させた名詞句と普通名詞の所属形が《場所》として扱われる、とまとめている。

また、《場所》として扱われる名詞句について論じた中川 (1984) では、名詞句に対する制限

が加えられる場合を「場所表現」と総称し、名詞句が「場所表現」に用いられた場合、その名詞句が《場所》として扱われると述べている。

このように、先行研究において《場所》として扱われるということは、「ある名詞句が位置名詞を後置させることができる」ということであり、名詞句のもつ統語的な特徴であると言える。

一方で、中川 (1984: 157) によれば「... 場所表現では、位置名詞 or によって《場所》という意味素性を付与する過程が必要になる」のであり、《場所》を、ある名詞 (句) が「空間的な広がりを持つ」という意味 (素性) を持つこととして扱っている箇所も見受けられる。このような統語の特徴と意味的な特徴との混同の問題点については後に述べる。

2.2.2 所属形と具体性・個別性

ここでは、ある名詞 (句) が《場所》として扱われる理由について述べている先行研究について概観する。

まず、所属形が場所表現で現れることについて、先行研究では、抽象と具体という対比関係から説明している。金田一 (1931: 32) は「抽象的概念を表はす」のが概念形であり、それに対して「具体的概念を表はす」のが所属形であると述べており、知里 (1942: 523-524) は、「概念のみを表はす場合のみの形」が概念形で、「概念とともに人称概念をも示す場合の形」が人称形 (所属形) であるとしている。

次に、中川 (1984) が指摘しているのは、普通名詞は抽象的な概念を表し、位置名詞を後置させることで具体性を獲得するため《場所》として扱われるのに対して、普通名詞の所属形はすでに具体性・個別性を備えているため《場所》として扱われるということである。

誰のものとも特定しない《一つの腹＝同腹》という場合には、概念形 *hon* が用いられる。この *hon* は抽象的・不定的に言及されているのであって、空間的に位置づけることができない。そこで *wa* を後置させる場所表現では、位置名詞 *or* によって《場所》という意味素性を付与する過程が必要になる。それに対して《お前の腹》という場合には具体的な《お前の》という人物の所属物ということで *honi* という所属形をとるが、それによって《腹》自身も具体性・個別性 (identifiability) を獲得し、聞き手側にとって特定の空間に位置づけることが可能になる。さらに《お前》と《腹》とが「全体—部分」という関係にあるところから、その《腹》は《お前》という人間の身体の一部にある《場所》としての解釈が可能になり、「場所」として扱われることになる。(中川 1984: 157-158)

つまり所属形の名詞は、「具体性・個別性」と「全体—部分関係」という2つの条件を満た

しているため、「具体性・個別性 (identifiability)」を持つ《場所》として捉えられるということである。

2.2.3 領域概念

前節で取り上げた中川 (1984) の考察に対し、田村 (2003) は、「なぜ位置名詞と名詞の所属形という形態統語論的に異なる 2 つの形式が《場所》という意味素性に対して同じ役割を果たすのか」という問題について、Svouru (1994) や、山梨 (2000) の議論を参考に、「領域概念」³ の観点からの説明を試みている。

領域概念とは、「空間表現の中で存在物 A を存在物 B に位置づけようとする際に、日常の知識として我々が持っている B の大きさや形等の属性や部分に関する知識等から、A と B の間にある空間的関係を決定する知識のこと」であるという。あるいは、認知文法に倣って「B を lm (ランドマーク) とし、A を tr (トラジェクター) として位置付けるときに必要な知識のこと」であるということである。

さらに、田村 (2003: 203) は、「アイヌ語の位置名詞は領域概念を言語化する領域形式のプロトタイプである」として、他の場所表現についても論じている。例えば、所属形については、概念形単独では lm となる領域が決定できないが、人称接辞を用いることで、「持ち主」という lm にあたる領域を想定することが可能となり、それに対する「場所」というものを解釈できるようにするという機能を持つということである。これを、「場所を表す名詞句 ([NP1 + PN] NP2) において、NP1 は lm、PN = NP1 の領域概念を表示する」という定式化をしている。すなわちある名詞 (句) NP1 は、PN すなわち位置名詞を伴って全体として NP2) という名詞句となる、ということである。

2.2.4 定性

中川 (1984) は、固有名詞や地名が場所として扱われる傾向にあると指摘しており、場所表現全体には、定性や特定性が関与しているという。あるいは、所属形の名詞は、「具体性・個別性 (identifiability)」を有しているため《場所》として捉えられると主張している。また、井筒 (2006: 18) は、以下の例文を挙げつつ、位置を表す格の目的語に立つ名詞句に働く制約について、定性 (definiteness) が大きく関わるとしており、「場所的存在を表すものでなければならぬ」というよりも「定表現でなければならぬ」という制約があるのではないかと指摘している。

- (7) a. cise or ta hosippa=an. 「私は家に帰った。」 (= 1b)

b. nean cise ta hosippa=an. 「私はその家に帰った。」 (= 2)

c. ku=kor cise ta hosippa=an. 「私は自分の家に帰った。」 (= 3b)

上記の例文における *cise* 「家」は、(7a) の場合は *or* を伴って「自宅」、(7b) は「先行文脈で言及された家」、そして (7c) は「話し手の家」という形で解釈される定表現 (definite expression) となる (井筒 2006: 18)。北原 (2006: 119-120) も同様に、英語の名詞の定・不定の明示的な区別と並行させて、アイヌ語の「場所」を示す位置名詞を定表現として解釈し、したがってアイヌ語には定表現・不定表現の区別が文法に関係するとしている。以上、中川 (1984) の「具体性・個別性」と井筒 (2006) と北原 (2006) の「定性」の概念はほぼ同じのものであると捉えられると言える。

2.3 問題点

先行研究に関する問題点は、大きく分けて2つある。それは、《場所》という概念に関する混乱と、領域概念における定性に関わる議論である。

1. 《場所》という概念に関する混乱

中川 (1984) では、場所表現で用いられる名詞 (句) が《場所》であるというのはあくまで統語的な定義であり、意味的な定義ではないとしている。しかし、その動機付けについて論じる際に、「地名」は「空間的な広がり」すなわち場所性があるので《場所》として扱われる (中川 1984) など、「空間的な広がり」を持つということが《場所》として扱われる条件として考えられているようでもある。田村 (2003) も、中川 (1984) と同じく《場所》を意味素性と位置付けている箇所も散見される (例えば田村 (2003: 197))。さらに田村 (2003) の主張する領域概念は名詞 (句) の持つ意味構造、あるいは概念構造に関わる議論であって、統語的な定義ではない。

一方で、井筒 (2006) も指摘する通り、場所表現で用いられる「場所」という概念は、一般的な意味での場所とは隔たりがある。例えば、場所表現には抽象的な関係節を形成する形式名詞-*hi* のように、抽象的なものを表す名詞も含まれる。さらに言えば、田村 (2003) の挙げている所属形の指す領域も、典型的な (空間的広がりを持つ) 場所とはいえない。つまり、《場所》という概念の定義が統語的なものか、名詞句の示す概念構造を指すのが曖昧になっている。こうした状況に対して、少なくとも、場所表現において共通する統語的制約と意味的動機付けの両方を記述する必要がある。

2. 領域概念における定性

田村 (2003: 205) では、中川 (1984) が指摘する、場所表現の持つ「具体性・個別性」といった特徴や、定性や特定性の関与を認めつつも、あくまで [NP+PN (位置名詞)] あるいは所属形の名詞句の構造のみに着目し、従属部の定性の関与を限定的なものとしている。また、「概念領域は語内部ではなく、統語的な構造で表示される」(田村 2003: 207) という定義では、地名を含めた場所名詞を説明することはできない。

2.4 所属形と参照点構造

井筒 (2006) は、Langacker (1991) の参照点構造を用いて、アイヌ語の人称接辞の説明をしている。「所有表現というもののすべてに共通しているのは、一方の存在（われわれが所有者と呼ぶ存在）が他方の存在（所有物）との心的接触⁴のための参照点として喚起されるということ」であり、人称接辞は、動詞と名詞のいずれに付く場合も、それら動詞や名詞の指示対象と心的接触をするために用いられる参照点として機能する (Langacker 1991, 1993)。井筒 (2006) では、このような考え方を援用し、アイヌ語の所属形では人称が参照点となり、特定の部位を指示すると述べている。しかし、井筒 (2006) は、所属形以外の場所表現全般に関しては、この参照点構造を援用しておらず、ただ記述するのみに留まっている。

2.5 本論の立場

以上、先行研究とその問題点を概観した。そこで本稿では、次の2点の観点からの分析を試みることにする。

1. 定性

本稿では、井筒 (2006) の議論に基づき、参照点構造の観点から、定性、あるいは具体性や個別性といったものが、名詞句の持つ概念構造の中でどのように現れているのかとすることを分析する。さらに、同じ場所表現でも統語的に異なるそれぞれの場合において、定性（あるいは中川 (1984) の言う「具体性・個別性」）が統語的・意味的にどのように実現されているのかを分析する。

2. 空間のメタファー拡張としての《場所》

場所表現における《場所》の概念に関して、実際の具体的な空間的広がり概念（日常生活における「場所」）との関わりについても曖昧なままであった。しかし、場所表現においては、名詞句は具体的な場所（地名や語彙集の場所名詞や位置名詞）だけでなく、

より抽象的な関係（所属形や形式名詞）を表すことができるのも事実である。あらゆる概念の構築は人間の日常における実際の経験に基づくとする認知言語学の観点から見れば、中川 (1984) の言う《場所》として捉えられる名詞句は、「ある空間的広がりの中における様々な存在から一つの存在が決定される」という概念構造を有していると言える。これは、場所表現という形式すなわち統語的特徴によって与えられるのではなく、場所表現が現れる文における概念構造に由来するものである。したがって本稿では、認知言語学の観点から、これを場所表現における名詞句の持つ意味の「具体的な場所から、抽象的な場所へ」の抽象化の過程（プロセス）と捉え、概念メタファー (Lakoff and Johnson 1980, Lakoff 1987) などの観点から分析を記述を試みる。

3. アイヌ語場所表現の定性

今までは、アイヌ語の「場所表現」に関する先行研究について触れ、さらにその分析の問題についても指摘してきた。この節では、実際にアイヌ語の場所表現を観察し、分析を試みる。

具体的には、井筒 (2006) における所有表現の参照点構造による説明を、さらに他の場所表現にも拡張していく。ここで、各場所表現において、何が定性を持つことに寄与しているのかということについて論じていく。

3.1 参照点構造に基づく場所表現の分析

参照点構造とは、言語（表現）の意味構造において、空間的あるいは心理的に接近しやすいものを参照点とした上で、そこを経由し、ターゲットとなる事象を指示するというものである。

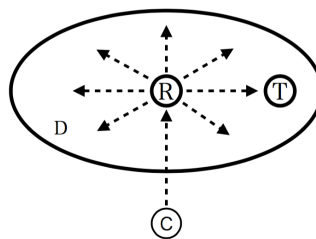


図1 参照点構造 (Langacker 2008: 84)

この図において、まず認知主体 (Conceptualizer= C) は、要素の集合である支配域 (Dominion=D) の中で際立っている要素である参照点 (Reference point=R) に注意を向け、参照点に

よって喚起される潜在的な目標の集合である支配域 (Dominion=D) の中から目標 (Target=T) が一つ選択され、そこへと心的な経路 (mental path、破線の矢印で示す) を通じて注意が移行する。ここで、支配域は「潜在的 T (potential targets) の集合」であり、参照点は、多くの異なるターゲットの中から一つが選択される (Langacker 2008: 83-84)。

3.1.1 支配域の種類

山本 (2013) によれば、支配域が提示される際、「位置特定」や「所有格表現」あるいは「連想」という様々な支配域において、潜在的ターゲットの集合が決定される。例えば、「位置特定」という支配域では、上・下・左・右といった空間位置関係が潜在的ターゲットの集合となる。人称代名詞を参照点とする所有格表現において、潜在的ターゲットは「彼」の「所有物」の集合となる (山本 2013)。

3.1.2 参照点構造と定性

定性とは一般的に、多数の中から一つが決まることであると言えるが、本稿では、参照点構造の観点から、「何らかの形で特定の D が選ばれ、複数の潜在的ターゲットの中からターゲットが一意に決定されること」として定義する。本稿では、この概念構造を、統語構造と合わせて次のように表示する。

- (8) 概念構造 = $\langle R, D \{ \} \rangle$ R=Reference Point, D = Dominion
統語構造 = [X]

この表示において、 $\{ \}$ 内には潜在的ターゲットの集合名が、X にはそれぞれの統語の表示が入る。以下ではこの表示を用いて、《場所》として捉えられる名詞句の概念構造を記述していく。

3.2 位置名詞

まずは、格助詞と共に起する時のアイヌ語の位置名詞 (PN) と名詞 (N) との概念的な関係を、参照点構造の観点から整理する。位置名詞を用いた場合の潜在的ターゲットとしては、参照点 (R) となる対象を中心とした位置 (上下左右など) が挙げられ、これが「位置特定」の支配域 (D) であると言える。

- (9) a. hoka etok ta
 炉の先 上座 に

「炉の先の上座に」

b. kotan pa ta

村 上に

「村の上（のはずれ）の」

(9a) の例においては「炉」が参照点となっており、そこを中心としてさまざまな位置関係がターゲットとしての可能性を帯びる。そして「～の先」という位置名詞によってそのターゲットが一意に定まる。したがって、定性は後続する位置名詞によって与えられる。次に、(9b) の例においては「村」が参照点となっており、そこを中心としてさまざまな位置関係（上下左右など）がターゲットとしての可能性を帯びる。そして「～の上」という位置名詞によってそのターゲットが一意に定まるということである。逆を言えば、参照点に達した段階では、まだターゲットが決定されていないため、定性は表れてこない。後続する位置名詞によって初めて、定性を獲得するのである⁵。

アイヌ語では、位置名詞を伴う場所表現の概念構造と統語構造は以下のようにまとめられる。以下の表示において、丸括弧内はそれぞれの概念および名詞（句）の内容を示す。

(10) 概念構造 = < R (対象), D {位置関係の集合} >

統語構造 = [N (普通名詞の概念形) + PN (位置名詞)]

3.3 所属形

2節でも見た通り、アイヌ語の名詞は所属形は概念形と形態的に異なる。所属形となる名詞は「所属先」という D を喚起し、その中で一つの要素が決定されると考えられる。井筒 (2006) でも既に述べられている通りだが、アイヌ語の名詞の所属形が示す概念構造には参照点構造を見出すことができる。この参照点構造と定性がどのように対応するのかを以下で分析する。

(11) a. a=kotanu ta

1SG=村 (所属形) に

「私の村に」

- b. teke-he ta
 手-所属形接辞 に
 「(彼／彼女の) 手に」

(11a) では、*a*=という人称接辞で示される＜私＞が参照点となり、*a=kotanu* がターゲットである「私の村」を指示している⁶。

また、(11b) のように、名詞の所属形（ここでは所属形接辞）という形式により、参照点となるべき概念（ここでは＜彼／彼女＞）が喚起され、それを参照点とすることで名詞全体がターゲットとしての概念を表すことが可能となる。ここでは所属先（＜彼／彼女＞）が参照点となり、名詞 *tekehe* がターゲットとなる。

また、次の例は、普通名詞（所属先）+ 場所名詞、あるいは普通名詞（所属先）+ 普通名詞という形式によって所属関係を表している。

- (12) a. aynu mosir ta
 人間 国（大地） に
 「人間の大地に」

- b. amam ci=hok kusu Mina tura sisam maciya ta sapa=as.
 米 私たち=買うために ミナ 一緒に 和人 町 に行く=私たち
 「米を私たちは買いに、ミナと一緒に和人の町に行った。」

(12a) における *mosir* は一般的に場所名詞とされているが、大抵は *aynu* 「人間（の）」や *kamuy* 「神々（の）」のような所属先を表す名詞を伴っている。これは一種の所有表現であるとも言える。したがって、「人間」や「神々」が、指示対象を同定するための参照点とみなされるため、定性を持つという分析が可能となる⁷。一方で、(12b) の *maciya* は普通名詞であり、これは、場所表現の制約から言えば例外のように見える。しかし、これを参照点構造の観点から見れば、*sisam* が参照点であり、*sisam maciya* が名詞句としてターゲットとなると考えられる。このような関係をまとめると以下ようになる。（統語構造内の Pers は人称接辞を表す）

- (13) a. 概念構造＝＜ R（人称）, D {人称と関係を結ぶものの集合} ＞
 統語構造＝[Pers（人称接辞）＝N₁（普通名詞）-Poss（所属形形成接尾辞）]
- b. 概念構造＝＜ R（所属先）, D {R＝所属先と関係を結ぶ場所の集合} ＞

統語構造 = [N₁ (普通名詞) + N₂ (普通名詞)]

3.3.1 指示詞と参照点構造

井筒 (2006) の参照点構造の観点からすれば、指示詞を伴う名詞も、同じように参照点構造を持つと捉えられる。(空間) 指示詞は、ある空間を別の空間から何らかの形で区別するという機能を持つと言える。佐藤 (2008) が述べている通り、指示詞の体系は、＜会話の場＞あるいは＜私＞を中心とした指示の体系を表している。つまりここでは、*tan* (ここ)・*taan/nean* (そこ)・*toan* (あそこ) という、＜私＞から距離を基準とした空間的 (あるいは抽象的) 位置関係を表す要素を潜在的ターゲットの集合となる D が選択され、かつその中から一つの指示詞が指定される。アイヌ語の指示詞体系は、近称 (*tan*)、中称 (*taan*)、遠称 (*toan*) という有限の集合を前提としており、その中から一つが選ばれるため、その場所に限った定性を与えることが可能となる。指示詞は、D (指示詞体系) の選択とターゲットの指定の両方の役割を持っていると言える。

指示詞を用いた場合の場所表現は次のように定式化できる。

(14) 概念構造 = < R (指示の体系の中心) , D {指示の体系} >

統語構造 = [N₁ (指示詞) + N₂ (概念形普通名詞)]

3.4 場所名詞

ここまでは指示詞、所属形、位置名詞という異なる表現によって表される概念構造がそれぞれ定性を持つということを示してきたが、以下では、今まで記述がなされてこなかった場所名詞について考察していく。

場所名詞には、形式名詞、地名、そして「それ以外の名詞」が含まれる。「それ以外の名詞」の中には、形態的に分析が可能なものとそうでないものが存在する。したがってここでは、形態的に分析ができるものを「合成的場所名詞」、不可能なものを「語彙的場所名詞」と呼ぶ。

3.4.1 合成的／語彙的場所名詞

まず、地名と形式名詞以外で場所名詞として登録されているものを、井筒 (2006) 付録の「旭川方言アイヌ語辞典」の中から検索したところ、大きく分けて 2 種類に分類できることが分かった。以下にそれを示す。

表1 場所名詞の分類

位置名詞を包含しているもの		意味的に場所を表すもの	
ruhontom (ru-hontom)	途中	iwor	猟場としての山々
rusam (ru-sam)	路傍	kim	(狩猟・採集の場としての) 山
usam (u-sam)	互いのそば	kotan	村、住まい、世界
mosirso (mosir-so)	地表	mosir	島、大地、国
annoski (an-noski)	真夜中	so	活動の場、面、立場
tonoski (to-noski)	真昼		

まず、「位置名詞を包含しているもの」、つまり合成的場所名詞について分析する。例えば、*annoski*「真夜中」は、これも形態的に見れば、*an-noski* [夜-真ん中] であって、普通名詞と位置名詞との組み合わせであることが分かる。同じく *tonoski*「真昼」も、*to-noski* [日-真ん中] と分析できる。つまり、これらも位置名詞を用いた場所表現と同じく、位置を特定することによって定性を得ていると言える。

それ以外の場所名詞、つまり語彙的場所名詞については、統語的に定性を表すような構造を見ることはできない。例えば、*kim* という単語は意味として「山」という場所を表すに過ぎない。

しかし、このような場所名詞は、その意味構造に定性を生み出すような参照点構造を見いだすことができる。それは、合成的場所名詞のような位置関係ではなく、語彙的場所名詞が含意している<動作>や<イベント>そのものを参照点とする構造であり、<狩場としての山>という意味構造は、単に空間的な広がりとしての「場所」の意味を持つというだけではなく、空間的な位置に関して、そこで起こる動作やイベントなどによって特定するという定性を与えるのである。

ここで、アイヌ語の使用される文化的背景を参照する必要がある。アイヌの文化において、一つのコミュニティの生活圏は *iwor* と呼ばれ、これは文化的に一つに定まっていたという。つまり、「山の狩場」である *kim* という概念は通常一つの場所のみを指すと考えるのである。これは英語の *the post office* や *the church* などのように、通常町に一つにしかない建物が定冠詞付きで表されるのと同じ原理であると言える。

したがって、語彙的場所名詞は、指示する対象が日常経験の中でたった一つの場所として解釈されるため、定性を持つと言えるのである。したがってこの場合の D は日常生活における生活圏ということになる。これは、のちに論ずる地名の定性の分析とも関係する。

以上の分析から、場所名詞は、位置名詞を包含するもの（合成的場所名詞）、形式名詞、そしてそれ以外の、生活圏における定性を表す場所名詞＝語彙的場所名詞 (Lexical Place Noun=LPN)

の2つに分けられることがわかる。この分類に基づいて、以下のようにそれぞれの概念構造と統語構造を表示する。

- (15) a. 概念構造 = < R (対象), D {位置関係の集合} >

統語構造 = [N₁ (普通名詞の概念形) — N₂ (位置名詞)]

- b. 概念構造 = < R (特定の場所), D {生活圏における場所の集合} >

統語構造 = [LPN (語彙的場所名詞)]

3.4.2 関係節を形成する形式名詞

関係節を形成する形式名詞では、これまでの議論とは異なり、形式名詞に先行する叙述部分が定性を与えると言える。以下の例を用いて説明する。

- (16) a. *upen=an hi ta*

若い=1SG ことに

「私の若かりし日に」

- b. *na ku=pon ine pa ku=ne hi ta*

まだ 1SG=小さい 4 歳 1SG=である ときに

「まだ私が小さい、四歳だったときに」

(16a) では、先行する *upen=an* 「私が若い」という叙述内容は<私>の過去の経験を表すが、これは<私>のもつ経験の要素の集合としての時間から、一つの叙述内容が選ばれるという意味で、定性を与える内容であると言える。また、(16b) 例も、*ine pa ku=ne* 「私が四歳であった」という<私>の経験に関する叙述が先行している。ここでは、<私>が経験しうるものを表す叙述の総体から一つが選ばれるという意味で、定性を与えると言える。より抽象的な「発話者の時間の総体」という D の中から一つを選び発話していると理解できる。注意しなければならないのは、発話の内容に定性があるのではなく、修飾部として取りうる全ての可能性から一つが決定されるということで定性が与えられるということである。

- (17) 概念構造 = < R (叙述内容), D (発話者の発話の総体) >

統語構造 = [MP (修飾部) + N (形式名詞)]

3.4.3 地名

アイヌ語の地名は、先行研究でも言われている通り、ある特定の空間的広がりを意味的に含む固有名詞であるため、場所表現の中でも扱われるとされてきた。また、瀬戸 (1995: 110—111) は、「地名が構築する場所は、典型的には明確な輪郭をもって、特定の空間を持続的に占めているものとして私たちにとって存在している」という。つまり、地名が用いられる際には、すでにある対象が領域の定まったものとして概念化されているということである。

また、地名で指示される場所は、私たちが生きる実際の世界の中でたった一つの対象として、しかも領域概念をはっきりと認識できる対象である。英語において普遍的で唯一の存在が *the* を伴って表される (e.g. *the Sun*, *the Earth* など) のと同様に、実存の世界において固有のものとして特定されるということである。ここで、地名の概念構造は以下のように定式化できる。

(18) 概念構造 = < R (地名) , D (地名の集合) >

統語構造 = [地名]

ここまでの分析は、2 節でも見た通り、既に中川 (1984) によって指摘されていることと同じである。しかし、語彙的場所名詞の項で行った分析と同じく、ある場所のコミュニティにおける個別性という観点からの分析が可能である。

アイヌ語の地名は形態的な分析が可能であり、その場所における活動や利用価値がそのまま表れていることが多い。アイヌ語の地名を大まかに分類すると、小地名と、その土地の様態／用途を叙述しているような地名の二つに分けられる。小地名は、*si-horkapet* (本流-幌加別川) や *nupka-kus-huranui* (野原-通る-富良野川) の様に、ある地名との相対的な関係によって定められた地名であり、既に定性のあるものとの比較から、対象となる土地も定性を持つと考えられる。

次に、様態を叙述している地名は、*pira-kes* 「崖-下手」(平岸) など、位置名詞を内包しているものもあれば、*hure-nay* 「赤い-川」(振内) など、その土地の知覚経験の可能性を表しているものもある。これらはその土地での知覚／経験の可能性によってその場所の個別性を表していると言える。また、次の 2 例のように *-us* 「-いつもする」といった習慣性を表す動詞が付加されることが多い。井筒 (2006) 付録の「現代アイヌ語辞典」(p.351) によれば、「動物や植物が「場所」に存在することから「～に群生する」の意味が、活動や行為が「場所」で多数回生することから存在することから「～が通常行われる、～がしばしば行われる」の意味が派生する」という。このような習慣性は、アイヌのコミュニティにおいて定性を持つということは容

易に想像出来る。

(19) a. riya-us-to

越冬-いつもする-湖

リヤウシ (網走市)

b. rar-us-i

泳ぐ-いつもする-所

良瑠石 (ラルシ) (北檜山町)

さらに、(19b) のように、地名では多くの場合、抽象化された名詞化接尾辞-i が多く用いられている。日本語訳では「～ところ、場所、時、頃」など、空間的・時間的な場所を表す一般的な名詞化接辞であり、ここでも同じく叙述内容が焦点化されている。すなわちここでは、その場所での知覚／行為可能性が際立っていることを示唆している。したがって、地名において定性を決定するのは、その土地における知覚／行為の可能性を表す動詞 (句) であると言える。

以上の議論を踏まえ、地名1 (小地名)、地名2 (空間的位置を表すもの) 地名3 (様態や知覚／行為を含むもの) と地名を3つに分類し、それぞれの概念構造と統語構造を以下に示す。

(20) a. 地名1 (小地名)

概念構造 = < R (地名), D (位置関係の集合) >

統語構造 = [N₁ (地名) — N₂ (位置名詞)]

b. 地名2 (空間的位置を表すもの)

概念構造 = < R (参照点となる土地), D (位置関係の集合) >

統語構造 = [N₁ (普通名詞) — N₂ (位置名詞)]

c. 地名3 (様態／行為を含むもの)

概念構造 = < R (その土地での知覚／行為の可能性), D (実際の場所の集合) >

統語構造 = [VP (知覚／行為) — N (土地)]

3.5 まとめ

場所表現においては、名詞句が概念構造の中に参照点構造を持ち、それによって一つの関係性が決定される。つまり、ある名詞（句）が示す概念が《場所》として解釈されることは、空間の関係性よりもさらに抽象化した形で、ある参照点を経由してターゲットである概念にたどり着くことでその名詞（句）が定性を帯びるという概念構造がある、ということと同義であると言える。

4. 構文としての場所表現

3節で、場所表現の異なる名詞（句）について、それぞれの定性がどのように与えられるのかについて考察した。この節では、主に Lakoff (1987) や Taylor (1989) の構文の議論を参考に、場所表現のそれぞれの名詞句を構文とみなし、構文の形式と意味を記述する。Lakoff (1987) は、英語の *there* 構文に関する分析において、まず直示的 *there* 構文と存在的 *there* 構文に二分し、それらを中心に合計 16 個の下位構文が存在し、それらが放射状カテゴリーをなしていることを示し、さらに構文同士の関係は、メタファー、メトニミー、そして「交差 (intersection)」という関係で結ばれるとしている。また、Taylor (1989: 199) はスキーマとプロトタイプの考え方に基づいて、構文間の関係を 3 つに分類している。すなわち、1: 部分—全体の関係、2: スキーマと事例の関係、3: 動機付けの関係、である。

4.1 場所表現構文

以降ではこの二つの議論を記述の道具立てとして、場所表現をスキーマ的意味と統語的制約を持つ「場所表現構文」と捉え、場所表現で用いられる名詞それぞれの表現を下位構文とみなし、構文間の関係をネットワーク的に記述していく。

4.1.1 位置名詞

位置名詞を伴う場所表現は、典型的な概念構造を持つと言える。場所名詞の一部には位置名詞を内包しており、また、位置名詞を必ずしも省略しなくても良いという特徴も、この位置名詞構文が統語的によりスキーマ的な構文であるということを示している。

4.1.2 所属形

所属形は、空間的な関係性を基本的な身体経験として捉え、他の構文が持つ概念構造が拡張事例として捉えられる。所属形の表現は「位置関係は所属関係を表す」というメトニミー的な解釈が可能である。人間の通常の経験において、自分のものほど自分の近くにあり、他人に属するものほど遠くに感じるのは自然かつ根源的な感覚であると言える。つまり、ある対象の所属関係を空間的位置の違いに対応させるといふ、＜所属関係は位置関係で表される＞（以下から＜POSITION FOR POSSESSION＞と表記）というメトニミー関係が考えられる。位置名詞の構文と所属形の構文がこのメトニミー関係でリンクされるといえる。

4.1.3 指示詞

指示詞は、指示の体系がDであり、その中から一つに決定される。先ほども述べたように、指示詞は、後続する名詞によって表わされる概念を＜私＞を中心とした体系に入れるということであり、＜私に近い位置にあるものは私のものである＞というメトニミーが関係していると言える。これは、所属形と同じ＜POSITION FOR POSSESSION＞の関係の具体事例であると言える。

4.1.4 場所名詞

場所名詞は、その3つの下位分類についてそれぞれの概念構造を考察する。

まず、形式名詞は、可能な発話叙述の後に付くことで名詞節を形成する。あえて叙述が空間的位置を占める＜モノ＞として捉えられているという必要はなく、日本語でも「Vしたところだ」と言えばある動作Vの完了を表すように、「空間から時間へ」＜TIME IS LOCATION＞といった具体物からより抽象的なものへのメタファー拡張がアイヌ語においても起きていると言える。

次に、位置名詞を内包する場所名詞を用いた構文は、位置関係に基づいてその場所が特定されていると考えることができ、この意味で元との位置名詞の構文と同じである。従って、位置名詞を内包する場所名詞を用いた構文と、元の構文とは部分—全体関係にあると言える。

最後に、位置名詞を含まない語彙的場所名詞や地名は、位置関係に基づいて指定されるのではなく、生活圏という限られた空間の中で特定の場所での知覚や行為の可能性によって、その場所が指定される。これは、その場所で行われるイベントがその場所そのものを代表するというメトニミー関係（ここでは＜EVENTS FOR POSITION＞と表記）と考えられる⁸。

4.2 場所表現の構文ネットワーク

場所表現の構文間には< POSITION FOR POSSESSION >と、< EVENTS FOR POSITION >、さらに< TIME IS LOCATION >という3つのメタファー的な関係性が関わっている。以上の議論を踏まえ、場所表現の構文をネットワークとして以下の図2のように記述する。

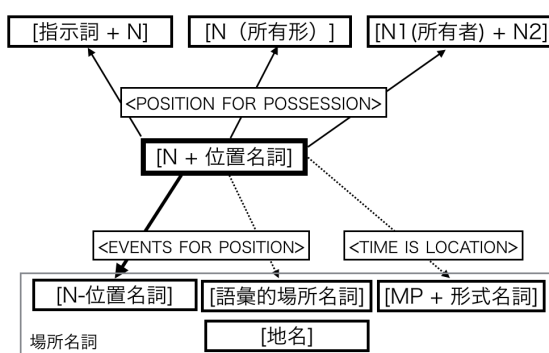


図2 場所表現の構文ネットワーク

5. まとめと今後の課題

本稿では、場所表現と呼ばれる状況において、言語形式の中で何が定性を担っているのかということについて考察してきた。位置名詞、指示詞、所属形における人称接辞をはじめとした所属を表す要素など、対象となる名詞に付加された要素が定性を担っている一方で、形式名詞を含む場所名詞は、名詞そのものが定性を担っていると言える。それぞれの支配域は異なっており、形式名詞は発話内容の中で、場所名詞や地名はコミュニティの中で定性が与えられる。さらに、アイヌ語の場所表現という形式を共有する複数の構文の意味は、具体的な空間的場所の指示から、より抽象的な所属関係や時間などへと拡張するメタファー関係としてまとめることが出来ることを示した。さらに、語彙的場所名詞や地名の一部は、その場所における具体的な知覚／行為の可能性によって場所を指示していることを示唆した。

また、本稿の課題と展望として、特に地名の表す定性に関する議論はまだ予測程度に過ぎず、実際の地名の文化的な証拠が不十分であるため、今後はあるコミュニティにおいて、地名としての言語表現が定性を持つものであったのかどうかを実証的に調査することが考えられる。まずアイヌ語地名と実際のアイヌの一つのコミュニティの生活圏との対応関係の有無を調

べ、それに基づいて地名と生活域を対応付けたモデルを作る。このモデルが有効であれば、他の地域にも当てはめることで、今まで覆い隠されていたアイヌのコミュニティの広がり姿を可視化することが期待される。

注

¹ 本稿における概念構造とは、ある言語表現の意味を、伝統的な真理値によってではなく、ゲシュタルト心理学の図と地の関係や、Langacker が提唱した心的経過 (mental path) や認知の際立ちなどといった認知言語学の様々な概念の関わる構造として記述したものである。

² *or* に限って言えば、空間的な場所だけでなく、*or ta* (～した時に) のような時間的な特定や、*or ta an hawe an* (～について) などのように関係節の内容も表現可能である。

³ これはいわゆる「概念領域 (conceptual domains)」とは異なり、より具体的に (空間的) 領域を決めるための何らかの知識 (体系) を指している。

⁴ 心の中で思い描く、非物理的な接触のこと。

⁵ 英語においても、位置名詞と定冠詞とが (半ば義務的に) 共起する。例えば、*the right side of a/the house* や *the bottom of a/the ship* のように、位置を示す名詞の前には定冠詞を用いるのが普通である。この場合も、参照点とされる *house* や *ship* は、もともと定性があるかどうかに関わらず、名詞句全体として定性を持つに至っている。

⁶ 田村 (2003) が指摘するように、この場合は「私」は実際に「村」を所有しているわけではないが、ここでは名詞句が実際の所属関係を表すか否かに関わらず、所属形と同一の参照点構造によって説明が可能である。

⁷ ここでは、一般的な「人間の大地」ということではなく、「人間」と「神々」が対比させられた上で定性が与えられると考えられる。

⁸ 店舗で購入したものをその場で食べられる場所を「イート・イン」と呼んだり、フィギュアスケートで競技終了後の選手とコーチが結果発表を待つ場所を「キス・アンド・クライ」と呼ぶなど、そこでの代表的で習慣的な行為や際立った行為によってメトニミー的にその場所を指すことは可能である。

参考文献

- 知里真志保. 1942. 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」『樺太庁博物館報告』4
井筒勝信. 2006. 「アイヌ語文法の概要」『I/YAY=PAKASNU: アイヌ語の学習と教育のために』,
第1章, 1-65. 旭川: 北海道教育大学教育学部旭川校.

- 金田一京助. 1931. 「アイヌ叙事詩ユーカラの研究」『アイヌユーカラ語法摘要』2
- 北原英法. 2006. 「アイヌ語を取り入れた「学習指導要領」：より良い英語学習への橋渡しとして」『I/YAY=PAKASNU:アイヌ語の学習と教育のために』, 第4章, 111-130. 旭川：北海道教育大学教育学部旭川校.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* Vol.4: 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- 中川裕. 1984. 「アイヌ語の名詞と場所表現」『東京大学言語学論集'84』149-160.
- 佐藤知己. 2008. 「アイヌ語千歳方言における合成名詞の構造」『北大人文研究』4: 55-68.
- 瀬戸賢一. 1995. 『空間のレトリック』東京：海鳴社.
- 田村雅史. 2003. 「アイヌ語沙流方言に於ける名詞の所属形と場所」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』6: 193-208.
- 田村すず子. 1982. 「アイヌ語沙流方言における上下を表す位置名詞」『言語研究』82: 1-28.
- Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Oxford University Press. (辻幸夫 (訳) 『認知言語学のための14章』東京：紀伊国屋書店, 1996).
- 山本幸一. 2013. 「2つのタイプのメトニミーと参照点構造—メトニミー成立の必要・十分条件—」『認知言語学論考 No.11』347-386. 東京：ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版.

A Descriptive Study on the Locative Expression in the Ainu Language

From the Viewpoint of Cognitive Linguistics

Takuya Inoue

This paper examines the semantic structure of the grammatical phenomenon called “locative expression” in the Ainu language from the viewpoint of Cognitive Grammar. In the Ainu language, a noun with locative case takes a positional noun, as in “*cise oske ta ku=an*” [house inside LOC 1SG=be] ‘I am inside the house.’ On the other hand, there are three cases where such positional nouns are not needed: (i) when used with a preceding demonstrative pronoun, (ii) in a possessive form with a personal affix, (iii) so-called “locative nouns,” which semantically indicate locations, including place names.

From a cognitive point of view, there are several studies on this issue. Tamura (2003) argues that it is possible to omit a positional noun when the word indicates “realm concept” in its conceptual structure and therefore the possessive form indicates the concept of “spatial realm.” Izutsu (2006), on the other hand, claims that the personal affix behaves as a RP (= Reference Point) to indicate a certain spatial realm as a target. The latter analysis employing a RP works fine, but it gives no explanation of the case of “locative nouns” in (iii), especially place names, which seem to indicate no spatial realm or any spatial entity as a RP.

Throughout the reanalysis of all cases, it is shown that the expressions of place in the Ainu language have a RPS (= Reference-Point Structure) to indicate a certain spatial realm or place as a target, which renders the noun phrases definite enough to appear in locative expression. This study shows that the schematic meaning of definiteness is realized as the same conceptual/semantic structure of specification of a target from spatial dominion, which is expressed by different syntactic sub-constructions. It also shows that some Conceptual Metaphors (Lakoff and Johnson 1980, Lakoff 1987) are involved in relation of these sub-constructions.